

名城大学は、開学100周年を迎えるにあたり、建物が次々と建ち、キャンパス全体がえんじ色で統一されつつあります。その中で、ひととき目を引く柱があります。オフホワイトの下地に緑色で「CKD」と書かれた文字。昨年度から設置されたものでしょうか。企業が施設の名称などに自社名を掲げる「ネーミングライツ」を活用した広告です。CKD株式会社は、東海地区を代表する機械装置メーカーですが、本学・機械工学科でも名高く、研究室の卒業生もこの会社で活躍しています。

照らされる隠れた機械要素部品

不足が叫ばれる今、学生にとって就職活動は骨の折れる道のりです。それだけにキャンパスで見かけるその柱が、彼らの背中を押しているようです。私たちが日常でよく目にする企業名の多くは、完成品をつくるメーカーです。しかし、中部地区だけを見ても、そうした企業は一握りです。一つの製品には、多くの部品メーカーの部品と技術が込められています。どれか一つの部品が欠ければ、機械は動きません。そして、部品・装置メーカーの存在は製品に確かに息づいています。キャンパスのネーミングライツは、そんな「確かな支え」の象徴のように感じます。

に生み出してくれます。過去にこの研究成果を製品化しようと試みたこともありましたが、精密さや安全性の面で課題があり、実現には至りませんでした。それでも、テンセグリティは「力を伝えるネットワーク」として確かに機能しています。外からは想像しにくくても、カタチの保持・変化を実現しています。

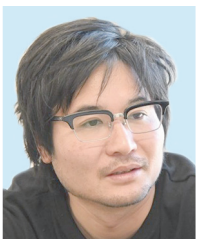
人工知能（AI）の技術発展は続いています。最近、身体を持つ知能、つまり「AI+ロボット」技術の実社会への浸透が加速しています。AIが扱うのはデータの流れだとすれば、ロボットの身体には「力の流れ」がその対である。私は考えています。力をいかに伝え、受け止め、逃がすか、その徹底的な工夫こそが次の技術革新につながると思います。効率よく力を伝達する精密な機構、しなやかに支える樹脂部品、衝撃をいなす柔軟な構造。こうした機械要素部品こそが、これからのAIロボット時代において、化石燃料や半導体と等しく、さらに大きな価値を持つようになると感じています。

AIが導き

世界を動かす

ています。

そんなCKDの柱を見て、ある学生が「うれしい」と表現していました。人手



名城大学理工学部教授
池本 有助

いけもと・ゆうすけ モジュー
ーシステム、ロボティクス、自律
分散システム。名古屋大学大学院
工学研究科博士後期課程修了。博
士（工学）。1978年生まれ。

形態学に関する研究を推進しています。テンセグリティとよばれる、硬い棒と弾力のある紐（ひも）を組み合わせた構造体を用い、ロボット身体設計を探索しています。建設途中の家や動物の筋骨格、あるいは作りのかけのプラモデルを思わせるこの構造は、ある方向には硬く、別の方向には柔らかいという独特の性質を持っています。その性質をロボットに適用すると、多様でしなやかな動きを自然

ものに盛んな中部地区だからこそ、完成品の陰に隠れがちな「支える力」を創造し続けることが肝要です。AIと比べると、緩やかに、柔らかく、確かに、隠れた機械要素部品が照らされる、それこそが、次をつくる原動力になると考えています。

